

# はなやか関西～文化首都年～2011『茶の文化』フォーラム概要

## 1. 開会挨拶



ほりい よしたね  
**堀井 良殷 氏**

(財)大阪21世紀協会理事長  
はなやか関西～文化首都年～2011「茶の文化」実行委員長

### 【講演内容】

本日はご来場いただき感謝したい。ご紹介があったように、(財)大阪21世紀協会では、関西のイメージ向上のため地域をブランドとして発信していく運動を長年行っている。その関係で文化首都圏関西の形成を目指す「はなやか関西～文化首都年～」の取組に大いに力を入れていきたいと思い、参加させていただいている。

今年度のテーマは「茶の文化」ということで、近畿各地で大変意欲的な取組が繰り広げられている。このテーマの取組のいくつかに参加させていただいて改めて「茶の文化」は非常に奥深いものだと感じた。長年日本人として生きてきたが、まだまだたくさんを知らない。

茶の文化や歴史は難しいと思う人もいるが、日常生活のなかに、日本人が日本人として育んできたライフスタイルとして染み込んでいるものである。しかも、日本人の作法、生き方、考え方から、美術、工芸、あるいは建築、造園、食文化に至るまで幅広い裾野を持つ文化の一大体系であると改めて認識した。

さらにいえば、今年の東日本大震災で日本人ということを変更して私たちは考えさせられたが、日本人の精神性に奥深く横たわっているものが「茶の文化」だと思う。まさに日本人の精神、心のありようと深く結びついている。

政治や経済は東京が中心だが、文化は関西が中心だといえる。「はなやか関西～文化首都年～」の取

組を今年も是非成功させ、来年につなげていければと願っている次第である。

本日 11 月 18 日から 20 日まで、集中的な取組が大阪城で開かれる。今日はまずフォーラム、明日以降は各流派のお茶会もあり、茶マルシェ、茶の文化展なども開催されるので多くの皆さまにお声掛けしていただければありがたい。

本日は、茶の湯といえばこの人という権威の方方に集まっていた。はじめに茶の湯文化学会の会長である谷先生からご講演をしていただく。その後、特に「本物」の文化をどのように地域づくりにいかしていけばよいかという内容も含め、知見の深い先生方からお話を伺いたいと思っている。

どうぞよろしく。ありがとうございました。

## 2. 基調講演 「関西と茶の文化」



たに あきら  
**谷 晃 氏**  
茶の湯文化学会 会長  
野村美術館館長

### 【講演内容】

今日は茶の湯の先生方が大勢おられるにもかかわらず、私が基調講演することになったのは、茶の湯を中心とした茶文化を研究し、それについて若干詳しいからだろうと考えている。

今日の集まりは先ほど近畿地方整備局から説明があったが、関西を文化首都として捉え、そして活性化するという狙いのもとに今年度初めて取組が行われているわけである。

現在京都では国民文化祭が行われており、茶に関連する行事もたくさん盛り込まれている。あるいは、今月26日の関西文化の日にあたり、先だって亡くなられた河合隼雄元文化庁長官が主張して定められた「関西文化力」という言葉がしきりにいわれている。

そのことと近畿地方整備局が主催するこの催しが重複しているのではないかというご意見もあるだろう。また、相乗効果をもたらして関西の力を活性化し、文化力を高めていくのではないかという期待もあるかと思われる。

いずれにしても、それぞれの立場と分野で行っていただき、そして成功を収めていくということがまずは大事だろうと思う。

今日は日本の茶文化、特に関西との関わりについて話すよう依頼されたわけだが、その前に茶文化というものは一体どのようなものかということをご説明しておく。

まず、茶文化の形態としては、「食べる茶」と「飲む茶」がある。「食べる茶」は結果的にはそれほど広がりを見せず、現在では東南アジアの一部地域のみで

行われている。大半が「飲む茶」として茶の葉を受容する茶の文化になる。そして、もともと中国から発祥したものであるが、現在では世界中に広まっている。

「飲む茶」文化の形態はいろいろとある。まず、常飲茶、これは日常的に茶を飲むこと。難しいことを考えずに日本人も行っているが、ご飯時に茶を飲む、あるいは他所から帰って来てまずは茶を飲む、といった日常生活の中で飲む形態のお茶ということになる。

それから儀式茶がある。儀式で茶が出される。結果的に最終的に飲むことになるし、あるいは仏や先祖などに捧げるというかたちをとる場合もある。それが最も古くから、そしてまた、きちんとした形式で伝えられているのが、禅宗寺院における茶礼というかたちだと思われる。ただしこの儀式茶は一般の方にはあまり目に触れることがない形式だと思う。

次に、談論茶がある。これはお茶という飲料を飲みながらいろいろなことについて語り合うということ。日本、中国、韓国などで行われていた文人茶と呼ばれるものがある。あるいはあまり行われることはなくなったと聞いているが、英国におけるティーパーティーもそれに含まれる。

また、最近若者が「お茶でもしない？」と誘いあって喫茶店やカフェなどへ繰り出していく。結果的にお茶を飲まず、コーヒーを飲んだりパフェを食べたりということを楽しんでいるかもしれないが、これもある意味では談論茶という中に含まれるものではないかと思う。

もう一つは、芸能茶という呼ぶべきもの。これは日本の茶の湯、あるいは煎茶、中国においては功夫茶、あるいは韓国で現在盛んに行われている茶礼などがこれにあてはまるだろうと考える。これは芸能という言葉に冠したように、ある一定の決まり、あるいは順序をその中に持ち、人に見せる、あるいは共同で楽しむというかたちをとるものである。

そしてまた、茶文化の中には茶葉の生産、栽培、製茶という生産に関わること、そして生産と消費者を結び付ける流通、こういうものも当然入ってくる。また茶に関わる様々な研究もある。例えば、文化、芸術、歴史、あるいは品種改良、茶の葉に含まれる成分が持つ効能、などに関する様々な研究を広い意味での茶の文化の中に入れてよいと思う。

しかし、今日ここでお話することは、茶の湯を中心とした茶文化になってくるであろうと思われる。もちろん煎茶もあるので、先ほどの分類としては芸能茶と括ったものを中心とした広がりを持つ茶の文化ということになるわけである。

まず茶の湯というもの、これは茶文化の中でも、あるいは世界中に目を広げても、世界では様々な茶文化があるが、日本の茶の湯ほど歴史が長く続き、そして広い範囲を内包し、あるいは深いものを追求するものは、他に類を見ないものといってよい。

この茶の湯が日本でほぼかたちを整えたのは 16 世紀、1500 年代の最初になる。それ以前の茶の文化、あるいは茶を利用するということについては、茶の湯が初めてではない。文献に見る限りでは 800 年ごろ、既に中国から飲茶風習というものが日本へ入ってきている。ただし、当時の茶の飲用法は現在行われている抹茶、煎茶などの方法とは若干違う。団茶、餅茶と日本で称しているが、このスタイルでの飲み方であったと思われ、200 年ぐらいでほぼ廃れてしまう。つまり、西暦 1000 年ぐらいには見かけられなくなり、ごく一部の寺院で行われているにすぎないという状況であったように見受けられる。

かわって 1200 年ぐらいに抹茶という風習がやはり中国から、当時は宋の時代に、団茶と同じく留学僧、ただし抹茶をもたらしたのは禅僧である。茶の湯の世界では明庵栄西という人物がもたらしたといっているが、現在の研究では必ずしも栄西個人の業績、実績に負うものではなからうということになっている。

ともあれ 1200 年前後に抹茶という新しい茶の飲み方が既にもたらされたわけである。

それから茶の湯が成立するまでには、ほぼ 300 年の時間を要している。その間、抹茶の飲用が停滞するかといえば、そうではなかった。様々なかたちで茶が飲まれ、場合によって非常に賑わいを見せることもある。特に現在、闘茶といっているもの、当時は茶寄せと称していたが、それが盛んになり室町幕府が樹立されてすぐに出された、建武式目(幕府の基本条例)の第二条で禁止されているほど、言葉を換えれば禁止せざるをえないほど盛んに行われていたわけである。

その後も様々な状況、場面で茶は飲み続けられ、現在までつながっている。これは先の団茶というものが 200 年ぐらいで滅びてしまったのに、なぜ抹茶が入ってきてから 800 年以上も続いているかといえば、第一にはその味が良かったから。つまり、嗜好飲料として非常によいものだという認識があったのであろうと思う。事実、抹茶が入ってきた当時は、鎌倉幕府が樹立されて間もない頃だが、鎌倉に設けた武家階層たちがしきりにお茶を求めて京都へ出した手紙が残っている。「昨年もらったお茶はなくなってしまったので、是非とも早く送ってほしい」「この前送ってもらったものは大変美味しかった」というような意味を書き連ねた手紙類が残っている。

したがって、一つには嗜好飲料として、飲み物として支持層を広げていったこと。それ以外にも茶を介した一種の遊びのようなものが拡大していつている。そしてまた、室町の将軍家においては会所という一種の迎賓館が営まれ、そこで中国からもたらされてきた文物を将軍の富と権力の象徴としてお客にみせたということがある。その中でも茶が供せられている。

様々なかたちや場面、あるいは受容の形態によって抹茶が飲まれていたわけである。それが 16 世紀の初めになって茶の湯という一つのかたちにまとめあげられていったと私は考えている。

そして、この茶の湯が成立したとういことは何をもっていうのだろうか。それは専用空間としての茶室、それから専用の器物としての茶道具、そして茶を点てる準備をし、客に供して使用した器物を収納する一連の動作をひとつにまとめあげた点前、この3つが整って初めて茶の湯である、といえるように思う。

現在でも抹茶を飲んでもこの3つが伴わなければ茶の湯をしたとはいえないと私は考えている。

そしてこの茶の湯は多様な流行を生み、特に関西、京都・奈良、そして堺を中心にして、その富裕層、つまり上層町民たちの間に受け入れられた。残念ながら、その当時はまだ大阪は町として成立していない。その三都の間で茶の湯が非常に盛んにおこなわれていることを、京都に入ってきた織田信長、その後を引き継いだ豊臣秀吉が政治的に利用した。茶の方も権力者と結び付くことによって、よりその基盤を強固にしたというような考え方もできるかと思う。そこに千利休という一種の天才が出現し、大変な権力を豊臣政権の中において持っていた。

ただし、現在、千利休は神格化されてしまった。神様に近いような存在になってしまい、何かといえば利休が始めた、利休がつくった、利休が考案したということがいわれているが、これはかなりの部分が後世に敷衍されたものであり、実態とは異なることが多々あるように見受けられる。

しかし、利休は偉大な人物であったということについては間違いない。そして、その利休の弟子と称する人たちがその後も活躍し 17 世紀になると、例えば古田織部、小堀遠州、あるいは金森宗和、そして利休直系の孫である千宗旦。あるいは、少し遅れて片桐石州などと俗に茶匠と呼んでいる人物達が、さらにそれぞれの茶の湯を拡大していった。

その後、18 世紀に入ると家元制度が確立し、利休の血脈であり千家と称す家が家元として現在にまで続いているわけである。これは早い時期に、表千家、裏千家、武者小路千家の三つに分かれ今もなお続いている。現在では多少のかげりが見えるというものの、この家元の力がかつて 500 年の茶の湯の歴史の中で見られなかったほど大きな存在になっていることがいえる。

そして、茶の湯の成立からは大分遅れるが、18 世紀に入ると煎茶、現在煎茶道と呼ばれる、先ほどの分類でいうと、芸能茶の一種が成立する。煎茶の歴史について、色々と難しいところがあるわけだが、煎茶という飲み方、葉っぱにお湯を注いで飲むという飲み方が日本に入ってきたのは、抹茶より大分遅れて、300 年ほど遅れる。そして、それがかなり広まるのが、17 世紀に入ってからのことになる。ただし、そう

いった煎茶、緑茶といってもよいが、飲むことができたのは、ごく限られた階層、つまり武家、公家、あるいは一部の僧侶、富裕町民に限られるのは抹茶と同じである。その煎茶、抹茶を飲むことで、先ほど申した談論茶というものが大阪を中心に形成されるようになる。その中心的人物になったのが、木村兼葭堂、あるいは上田秋成といった俗に文人と呼ばれる学者、画家、あるいは小説家、医者。そういった人たちがそのような集まりに顔を出していたようである。

その中で京都に小川可進という人物が、大阪では田中鶴翁という人物が出現した。両者が芸能茶として煎茶というものを確立した。したがって、煎茶が確立するのは抹茶よりは 200 年以上遅れ、18 世紀の後半ぐらいと考えてよいと考える。そして、京都においては、小川可進の末裔、その流れをくむ小川後楽堂という家がいわば家元としての存在になっている。また、大阪においては、田中鶴翁は血脈的には引き継がれていないが、現在の一茶菴が田中鶴翁の流れになる。

茶の湯、煎茶というのはある面で 18 世紀に行われていた茶の湯批判がベースになっている。もう一つは、中国に対する憧れである。茶の湯も元をただせば和と漢、つまり日本的なもの与中国的なものをミックスして独特なものにしたという言い方ができるわけだが、18 世紀になるとほぼ日本的なものになってしまっている。それに対してややこしい器物を高価で売買している、あるいは一つの茶碗から皆が一緒に飲んで不潔極まりないという批判が起きたわけである。

そしてまた、かつての宋ではなく、清時代の文物を盛んに取り入れるわけである。したがって、現在の煎茶の茶会に行くと、茶の湯とは相当趣の違った雰囲気がある。使われているものが今でも中国趣味的というようなものがたくさん使われており、茶の湯で使われているような、いわば日本の美を代表するようなものと相当違うわけである。

そういったことは流れとしてあるが、もちろん 500 年の間の茶の湯の歴史はとても一口で語るようなものではない。いずれにしても現在そういった茶の湯というものが、ある意味では日本の文化の底深くに根ざしているということは間違いないわけである。これは現在の日本人が「私がお茶のことはや

っていないから知らない」といっても、その茶の湯が持つ文化が発展してきたものを受け入れている部分が多分にあるわけである。

例えばその典型的な例を出すと、現在の日本食、日本料理といわれているものは茶の湯において茶料理というものが 17 世紀初めぐらいにほぼ完成する。そして一般のいわば和食レストラン、食を供する店舗ができてくるのは、江戸や大阪など大都市でも 17 世紀後半ぐらいになる。そして 17 世紀の初めぐらいにある程度確立している茶料理を参考にしている。

そして現在でも有名な料亭の料理は、茶料理そのものではないが、茶料理の影響を非常に強く受けている。別な言い方をすれば、茶料理を強く意識しているといえるわけである。また、和菓子を例にとっても、まさに茶の湯なくしては現在の和菓子というものではなかったと思われるほど、茶の湯から大きな影響を受けている。

ただ当初 16 世紀から始まるといってもその頃から現在我々が口にするような、きれいな甘くて美味しいお菓子が出されていたのか、というとそうではない。その当時は果物、そして米の加工品、もっと正確に言えば、米粉の加工品(団子、煎餅)である。それと今では想像がつかないが大根やシイタケ、場合によってはタコなどを煮つけたものが茶菓子として出され、17 世紀の後半、そして 18 世紀の初頭まで続く。

現在のお菓子、例えば今でいう、きんとんや上用饅頭などが発展していくのは 18 世紀になる。これは一つには砂糖の生産量、その流通とも深く関わっている。

16 世紀、利休が生存していたころには砂糖というものはほとんど手に入れることができなかった。全くなかったというわけではないが、非常に貴重なものであったことは間違いない。

このように今、例を挙げた料理や菓子だけではなく様々な礼儀作法など、あるいはマナーといわれるものの中にも茶の湯のあり方が色濃く反映されている。それ故知らず知らずのうちに日本人は茶の湯の影響を受けた生活をしている、ということもいえるのではと思う。そして、この関西というところは茶の湯や煎茶なども含めた茶文化が非常に深く根づいている地域だと思う。



第一に茶の湯や煎茶など家元と称しているものの主要なもの、歴史的にも重要であり、長く続いている主要なものは、茶の湯であれば三千家と藪内家、煎茶でいえば小川流

が京都、そして一茶菴流が大阪というように、東京、関東にも若干家元と称するところがあるが、歴史的にみても、現在の様々な影響力をみても京都ほど、あるいは関西ほど大きいとはいえない。

そしてまた茶に関わる寺院が京都には多い。大阪にはあまりなく、京都中心になる。堺にも若干があるが、残念ながら空襲を受け、町の半分ほどが焼けてしまい、由緒あるものが消失したという事情があり、茶といえば京都ということにならざるを得ないのが現状であるが、煎茶でいえば、黄檗山の万福寺という存在が非常に大きい。今でも万福寺においては年に1回、煎茶の流派が寄り集まって盛大な催しが開催されている。

さらに茶の湯でいえば大徳寺ということになる。茶の湯は思想としての禅の影響を非常に強く受けているが、なぜか禅でも黄檗宗や曹洞宗ではなく、臨済宗、また臨済宗であっても五山と称されるような有名で大きなお寺ではなく、林下と称された大徳寺というところと強く結び付いたわけである。その理由はいくつかあるが、現在大徳寺には有名な古い茶室がたくさんある。各塔頭にいろいろな由緒を持った茶室が多くあり、利休当時のものは残念ながらないが、江戸初期ぐらいまでは遡ることができるものがたくさんある。

それからまた関西には茶文化、煎茶に関わる遺跡がたくさんある。遺跡の話をするだけで約1時間は十分経ってしまう。あるいは一冊の本を書くことができる。ここでは具体的に例を挙げることはできないが、そういった遺跡が関西には非常に多く集中している。東京には江戸時代に入ってから遺跡は若干あるが、それ以前の安土桃山時代、あるいは室町時代の茶文化に関わる遺跡は皆無である。もともと江戸という町が 1600 年頃に急速に大きくなったので、やむを得ないことでもある。その意味でも大阪の町がかた



ちを整え出すのは天正13年に秀吉が大阪城を築城してからのことになるが、それでも江戸の町よりは10年ほど早く町として拓けてきているが、残念ながら大阪も空襲でかなり被害が大きい。それに対して京都は100%空襲がなかったわけではないが、焼失を免れて文化遺産というものが現在まで幸いにも残存しているわけである。

そしてまた、茶の湯、あるいは茶文化周辺の技術、あるいはそれをもとにした産業は京都が圧倒的に強い。東京は足元にも及ばない。その代表的なものが千家十職(せんけじっしよく)と称する集団である。つまり家がそれぞれ職方として持っている、例えば焼物や指物、漆、屏風など、あるいは釜をつくるという家業を中心にまとまっている。

さらに、菓子が茶の湯の影響を強く受けて発達したので、京都には著名な菓子屋が非常に多い。また、美味しい菓子として評判を集め、地方や東京から来られる方でもやはり京都の菓子はさすがに美味しいといわれる方たちが多い。

このような茶文化をゆっくり味わう環境、これは自然環境だけではなく、町としての環境のことである。茶の湯は市中の山居であるという言葉がかつて宣教師が残しているが、町中で行うことを一つの特徴とする。そして、茶の湯が根本思想としている侘数寄(わびすき)という考え方の中には禅が中心にある。ただ、そういったものをかつては、「閑居して山中に庵を構えよ」といっていたのが、市中の山居において庵を構えてそこで禅の修行をすればよいという考え方に変化し、これが茶の湯のバックボーンになる。

したがって、茶の遺跡も市中にあるし、また町家の中に茶室を設けている家が京都にはたくさんある。あるいは茶室でなくても、茶を楽しむことができるような設備、設えがあるところ。しかし茶の湯はある意味で非日常的な世界を演出するものなので、自宅で茶会を行うことがなかなか難しい。日常性を消去してしまうことは極めて困難である。したがって、そのために寺院の茶室や最近では公共茶室というものが数多くできているが、そういった場所に関西はこと欠かないということもある。

そしてなによりも関西の市民の間に茶の湯、茶文化というものが深く根付いているということが指摘できると思う。ただ、残念ながらかつてほどその根付きが

広く深いとはいえなくなってきたというのが現状ではあるが、それでもなおかつ茶の湯を支える人たちの人口の多くは関西の人たちになる。

そして、その人たちが中心になって茶の文化というものを支えているわけだが、また今回のような様々な催し物が行われることによって、かつての茶の湯、茶の文化というものの良さ、あるいは必要性というものを改めて再認識してかつてのように活性化することを願いつつ、本日の講演を締めくらせていただきたいと思う。

どうも御静聴ありがとうございました。



### 3. パネルディスカッション



#### ◇コーディネーター

橋爪<sup>はしづめ</sup> 紳也<sup>しんや</sup> 氏(大阪府立大学 特別教授)

#### ◇パネリスト

佐藤<sup>さとう</sup> 友美子<sup>ゆみこ</sup> 氏(サントリー文化財団 上席研究フェロー)

千田<sup>せんだ</sup> 稔<sup>みのる</sup> 氏(奈良県立図書館 館長)

角山<sup>つのやま</sup> 榮<sup>さかえ</sup> 氏(和歌山大学 名誉教授)

寺本<sup>てらもと</sup> 益英<sup>やすひで</sup> 氏(関西学院大学 教授)

#### 【パネルディスカッション内容】

##### (橋爪紳也 氏)



ここからはシンポジウムのパネディスカッションに移りたいと思う。茶の文化によって関西を文化首都とし、国内あるいは海外に伝えたいという我々の思いを受け

てこのプログラムが始まっている。

冒頭でまず私から15分ほどお時間を頂戴して、そもそも「はなやか関西～文化首都年～」とは何なのか、そしてなぜ今年のテーマが「茶の文化」の年になったのかというあたりを前スクリーンに映像を投影しながら説明したいと思う。

この「はなやか関西～文化首都年～」という事業の発端は、近畿圏の広域地方計画にある。国土形成計画の枠組で、近畿圏や東北圏など、圏域ごとに地域の将来どうするのか、10年間の計画を作成した。この策定委員会に私は、学識委員として関わってきた。

各府県とともに近畿圏管内の関係機関が担っているというこの計画では、地域が自立的に発展する力強く躍動する関西を目指すという考え方とともに、「文化首都関西」を形成しようという言葉が出てくる。なおかつ11のプロジェクトのうちの一番に「文化首都圏プロジェクト」を掲げている。他の圏域のプロジェクトを見たが、他の圏域計画ではこのような打ち出しをしているところはない。作成に関わりながら私もすばらしい提案だと思った。

なぜなら、従来の国土計画でも、東京は政治経済の首都であり、関西は文化の首都であるという、いわゆる「二眼レフ」論が議論された時期がある。関西の将来を考えるうえで、文化で地域や圏域をつかっていくのだという思いを、次世代へ伝えていきたいとかねて考えてきた。そのような志や思いが今回の近畿圏の広域地方計画でも残っているということに関して、まだまだ関西、近畿は捨てたものではないと感じた。これからも文化を地域の固有性として盛り上げていくという姿勢に共感を覚えた。

そこで出てきたキーワードが「本物」。「本物」と書いて「ほんまもん」と読む。我々関西には色々な「ほんまもん」がある。例えば滋賀県の高島市には、世界に類を見ない水の生活文化がある。兵庫県豊岡市は、コウノトリの共生で地域をつくってきた。京都府山城地域には、800年の歴史のある日本茶の原点がある。和歌山県の湯浅町は醤油の発祥地である。それぞれ日本独自の文化のなかでも、とりわけ大事な「ほんまもん」がある。我々はそれを活用して地域をつくっていかねばいけない。

「文化首都圏」とは、多様で厚みのある文化の集積を活かして、我が国を代表し牽引する圏域のことである。いわば関西、近畿圏が文化の力によって、これからの日本を背負うのだということがここでは高らかに謳っているわけである。具体的には、関西・近畿圏域のなかで、企業や市民の誇りとなる文化の力によって、地域の一体感を醸し出していかうというものだ。対外的には関西の文化をアピールすることで、関西への投資を促進していき、観光客も結果的に増

やしていきたい。関西の価値、すなわち「ほんまもん」の価値を世界に示していきたいところだ。

どのような事業をするのかということについては、近畿地方整備局の担当者とは何度も議論してきた。そのなかで私がぜひ参照すべきだと主張したのは、ヨーロッパで行われている欧州文化首都である。

ご存じのように欧州文化首都は、1985年のギリシャのアテネを皮切りにして、毎年各国の各都市で、年間を通じて様々な文化的な催し物を展開する国際的な文化プログラムである。各年次、選定された都市での催し物を、他の都市、他の国もサポートするものだ。

欧州文化首都は、当時、ギリシャの文化大臣であったメリナ・メルクーリが提唱したものである。そもそものきっかけは、EUという統合体をつくるときに、ヨーロッパは一つになるのだという思いを各国が持った。しかし、一つになればなるほど、その地域、その都市、その国の文化が大事だという考えも示された。要は文化の多様性を担保しながらヨーロッパは一つになる、ということなのだろう。

アテネ、フィレンツェ、アムステルダム、ベルリンというように誰もが文化の中心地だと思う都市が選定され、おおよそ一巡りした。そして、21世紀になってからは、小さな都市だが非常に強い個性のある街が選ばれるようになっていく。毎年ではないが欧州文化首都の事例を勉強し、欧州に出向くことがある。2010年、トルコのイスタンブールとドイツのルール地方に行ってきた。ルール地方は工業地帯だが、エムシャーパーク計画という国家的な事業によって、かつての産業施設を文化施設や観光施設に順次転用し、ユニークな産業と文化を融合している地域である。

ヨーロッパ文化首都を日本で、そして関西で行うとすると、例えば東アジア文化首都のような仕組みを構築して、中国、韓国、日本による持ちまわりでの開催となれば良いが、難しいだろう。そこで、年次にテーマをもたせてはどうかと考えた。関西の各都市、各地域が、しばしばよく似たテーマでよく似た文化事業をしているが、横のつながりや、ネットワークとして情報共有ができていないことが多い。結果、各地域ががんばって独自の取組をしているが、全体として強く

アピールすることができていない。これをつないでいくのはどうかと。

ではどうすればつなぐことができるのだろうか。私はテーマイヤーの考えを持つべきだと強調した。例えば、お茶、水、お酒、芸能、文楽、世界遺産などのテーマを選び、この年次はこのテーマでいこうというように関西全体で盛り上がるということを考えてはどうかと。そのような考えを基にして、近畿地方整備局の担当者とは意見交換するなかで、文化首都圏をつくるための文化首都年ということかどうかということ考えた。関連する各府県の方々と議論していただき、政令市とも理解を得ながらこの形をとっている。

たとえば90年代の中国の観光政策のように、各年次を「何々観光年」と決めているキャンペーンは世界各地にある。その関西版ということで、千田先生や他の先生方と一緒に委員会をつくり、テーマを決めさせていただいている。

そのなかで、今年は「茶の文化」でいこうと決めた。茶を媒介とする文化は、日本人の生活のなかで欠かせないものである。コミュニケーションにも欠かせないし、おもてなしにも欠かせない。また、茶の文化は、茶の湯、茶道具、茶室、茶器、庭園、料理、和菓子など、ひろがりがある。その全てをまとめて関西の文化だと謳っていくべきだという思いを持って、茶の文化を選んだ。

48事業を横につなぐことが重要だということから、各自治体、各事業者、市民の皆様、学生の皆様にも協力していただいた。また全てを見て回れるようなパンフレットも作成した。地図を見てもわかるように、事業はかなり広域に展開している。市民参加を主体としたお茶会のようなものもあるが、特に大事だと思うことは、産地でのプログラムも含まれている点である。従来、消費地である大都市と、産地との連携が十分ではなかったと思う。今回のプログラムでは産地と「茶の文化」に関するイベントをつなぐというきっかけになったという点で大きな意味を持つと思う。

また今年だけがイベントの年だと思われがちだがそうではない。今年を契機としてお茶に関する地域間連携が始まり、今後とも継続して、多くの関係者のご協力とご努力を集めていきたい。そして文化首都関西全体のブランドとして茶の文化を発信していきたいという思いを持っている。



簡単ではあるが、「はなやか関西～文化首都年～」の考え方を説明した。この後、1時間ほどお時間をいただきパネリストの皆さんに、それぞれ専門の話をしていただきたい。

まず、一巡り目は自己紹介もかねて関西の文化と「ほんまもん」についてお話していただければと思う。関西が日本の文化首都圏になることは、どういうことなのか、あるいは、「ほんまもん」を核とした取組はどのようなものなのか、また「ほんまもん」の心とは何なのかというあたりについて、ご意見をいただきたい。



## (角山 榮 氏)



皆さんと違う性格があります。

自己紹介から始めることになれば、本来は日本史の専門家ではない。私は経済史、つまり経済学、そしてイギリスの方からお茶の世界に入ってきた経緯があり、

イギリスを研究していると、お茶を柱にしてイギリスという国は成長してきたといえる。ところが、そのお茶をイギリスでは生産できない。堺市も同様にお茶の生産地ではない。しかし、堺市から、すばらしいお茶の文化を発信した。ところが、同じようにイギリスはお茶の生産地ではないのに、いまや世界の最大のお茶の消費国になっている。お茶といっても紅茶である。

ところが、経済学の角度から問題提起すれば、お茶の文化はどうかといえ、一つのものに私たちをつけるというように指摘できると思われる。ということは、例えばイギリスもお茶、紅茶であれ、イギリスはどのような付加価値を付けたのか。全く日本や中国にもない価値を付けた。それは、砂糖とミルクを入れた。砂糖とミルクを入れることは東洋では考え付かない。例えばアメリカでは日本から輸出したお茶に砂糖とミルクを入れて飲んでいて、それに対し、飲み方が違うといったそうだが、それは文化である。イギリスの文化がどの程度影響を与えたのかわかる。

簡単に申したが、砂糖はものすごく高い値段で庶民の手に入らない。もちろん、イギリスでは砂糖を生産できない。当時、砂糖はポルトガル領ブラジルで生産されていた。そして、イギリスがこの植民地から得ていた砂糖がイギリスのチャールズ2世へ届けられたのが1662年だが、ポルトガル王の王女、キャサリン・オブ・ブラガンザというお嬢さんがいて、銀をチャールズ2世に持って来る予定だったが、銀の代わりに砂糖を持ってきた。その結果、チャールズ2世はものすごく喜ばれた。当時国王といえども砂糖は手に入らないぐらいの貴重なものだった。そのような状況の中、お茶に砂糖を入れた。

次が経済の問題で、砂糖で儲けようとした。そのためにイギリスの国内では生産できないから、カリブ海

諸島に砂糖プランテーションをつくった。労働者はイギリス人ではなくアフリカから奴隷を連れてきた。奴隷制度をまず設け、そして奴隷を使って砂糖をつかった。その砂糖がどれだけイギリスに入ってきたか。この莫大な資産を基礎にして産業革命があった。それが、茶の文化の第1号になった。これはすごいことだと思う。

次に、もう一つ言っておきたいことは、アジアから入って来たお茶にはもう一つの文化がある。有形文化財ではなく無形文化財が付いてきた。どのような文化財かといえば、コーヒーも入ってきたが、コーヒーは「コーヒーパーティー」という言葉がない。それに対して、同じ頃に入ってきたティーには「ティーパーティー」という言葉がある。人々を結び付けるという人間関係をつくり出すという何かを持っていた。

コーヒーは家の中で飲むのではなく、コーヒーハウスで飲むということで男性に好まれた。そうすると朝早くから夜遅くまで家に主人が帰ってこない。夜が更けても帰ってこない、そこで黙っていないのが女性である。女性が何をしたかといえば、不平不満をこぼしながら帰って来いということではなく、主人に帰ってきてもらうためには、中国から入ってきた一番高いお茶にさらに高価な砂糖を入れて主人に出した。このお茶を中心として朝食メニューに卵、ハム、ソーセージなどをたくさん並べて、そして主人を家庭に連れ戻した。こうして成立したのが **breakfast** である。

この当時の女性は、選挙権がなく、何の力も持たなかったにもかかわらず、すごいことだと思う。長くイギリス史を研究していると、この話は最も感激する。女性は歴史的に大変意味のあることを残した。これがお茶の文化である。そしてその文化が女性を中心にしてどう動くかといえば、まず、主人が仕事で行った後に数人集まり、お茶を飲みながら人間関係を築く。アフタヌーンティーといって婦人たちが集まって、それこそお互いの信頼関係をつくる絆になった。

茶の文化の最後は、家族全員が集まり、主人の帰宅を待ってディナーを始めるような素晴らしいライフスタイルである。したがって、女性たち及び家族の幸せは家の中にある。青い鳥は家の中にいるのだという。それがお茶の文化を中心にしたイギリスのすごい歴史である。

いわゆるイギリスの女性のすごい力とそれからお茶の力、その裏に実は日本のお茶があるのだということ。これは今まで日本の歴史の表にでない。日本の堺で発信したお茶の文化が日本を初めて訪れたヨーロッパ人を感化させた。とにかくヨーロッパ人がみたお茶のすごい文化は2巡目の時に申し上げる。

### (千田 稔 氏)



私はお茶の専門家ではないが、たまたま関西のこのようなプロジェクトに関係しているのでお呼びいただいた。

関西の文化がいま問題になっているわけだが、東京は政治経済で、関西の文化を大事にすればよいという意味はもちろんよく分かる。冒頭なので一般論的なことを申し上げるが、文化というものを我々はどうも低い次元でみてきたのかと感じており、私自身への反省でもある。

つまり、文化は音楽、美術、芸能を文化として限定した感がある。そうではなく、これから文化を捉えるには、政治も経済も文化の一部であるという見方をすると関西の文化論というのは、むしろ東京で様々な展開されている政治や経済活動に関してもっと独自の関西の文化から発言できるのではないかと。

例えば、かつては政治経済は文化的な人材が強かったが、最近の日本の政治や経済活動を見てみると、何か行為するときの規範が何もなくなり、経済はお金を儲けること、政治はとにかく悪口ばかりを言い、自分の所属する党を強くすること、それのみであり、全く文化の薫りが無い。そこに日本というものが直面している大きな問題があるかもしれない。それによって関西の経済界も本社を東京に移ってしまうという極めて悲観的というか、文化を亡くした行動が日本の中で行われている。

その意味では、「はなやか関西～文化首都年～」がこれから様々な展開を支えるものとして文化の規範を同時に示していき、それを政治家や企業によく理解していただく必要がある。なぜそれを申すかという、ある会合で関西の経済界のかなり大物の人から罵倒された思い出がある。それは「おまえたちは

文化、文化というけれども、俺たち経済界の人間がお金を引っぱってくる。その余ったお金で文化をやれ」と。その考え方が関西にある限り、文化の捉え方が変わらないと感じる。

やはり関西は文化砂漠であってはいけない。もっと緑の多い、人間が訪れやすい場所となるべきである。

そこで関西の問題として、「茶の文化」を一例として取りあげると、茶が関西を中心として一つの文化的な要素を形成してきた。その基盤になるのは何かといえば、我々は、美しく手入れされた茶畑の風景を見ることができるが、お茶の木というものが、飲めば美味しいということを誰が見つけたのか、私は不勉強でわからない。今、それがお茶だといえばそうだとはいえる。

しかし、もともと何もないところからお茶として選択してきた過程は、どうもブラックボックスに入っているような感じがしてならない。ただ、ブラックボックスに入っているもよいわけだが、やはり常緑樹である。常緑樹のお茶の木が選ばれる根底には何があるのかといえば、随分前からいわれている照葉樹林文化論があった。

これは、常緑の樹木を中心として形成される文化圏であって、ヒマラヤのふもと、中国の南部、そして日本列島の西日本につながる西の文化で、朝鮮半島の南側にわずかにかするわけだが、その自然的な基盤の中でお茶の葉というものが選ばれていく過程、これはおそらく日本で選ばれたのではなく、中国、あるいはヒマラヤ山脈のふもとで選ばれた様々な木の葉を試行錯誤して、その結果、この葉を選択して大変美味しい飲み物になるのだということがわかった。そのような過程があると、やはり、そのお茶が西日本の照葉樹林帯の中で現在に見るようなお茶の文化を形成してきた基盤である。

この基盤はどう考えても日本の中でお茶というものを考えるときの非常に重要な要素になる。つまり、緑の風景の中で、照葉樹林、つまり常緑樹で囲まれた風景の中からお茶というものが選択され、それが西日本で定着していく過程がある。したがって、これは堂々と誇り高く関西の文化であるといってもよいと思う。

つまり、西日本の文化というのは日本列島のなかで先行する。その中核になるのはやはり関西であるということから、関西ブランドにしてもお茶というものは、日本文化の中で非常に大きな影響を持っているだろうと思う。

そのなかで、まずお茶というものが、日本文化を考えるとときにどのような意味を持つのか。最初に一般論として申しておくが、我々の現代の生活は、例えばこのホールを見渡しても、あるいは皆さんの服装、あるいは私の持っているマイク、どれを見てもヨーロッパ、アメリカ文化のコピーである。大学の講義一つにしてもイギリスやヨーロッパの理論を翻訳して、そして講義が行われる。つまり大学もやはりヨーロッパ、アメリカ文化のコピーというものを売っている。そのコピーを学生が高い授業料を払って買うわけである。

つまり、コピーの生産力という点では日本は非常に秀でた国だが、オリジナルなものはなかなかできないということが繰り返して言われてきたわけである。しかし、それが茶道や一つの作法、あるいは文化の種をもって育てたということは非常にオリジナリティが高いわけである。

その点で関西ブランドを考える時に「本物」は何かと絶えず尋ねられるわけだが、その「本物」は日本で生み出されたもの、それが関西にあるのだ、ということとは非常に大事な意味を持つ。

東京は皆さんが行かれたらわかるように、コピー文化で埋もれているわけである。コピー文化の東京であるわけだが、「ほんまもん」というのは、ここ関西でできあがったもの。決してアメリカとヨーロッパにあるものではない。そういうものをこれから関西文化に、あるいは関西文化首都圏がまとめていくべき非常に大きな課題だと思う。

#### (橋爪紳也 氏)

角山先生は、洋の東西まで視野に入れた大きな文明論の見地からの発言だった。千田先生も照葉樹林文化という非常に大きな枠組みの中での指摘だった。

関西独自の、日本独自の創造性が重要だと思う。「メイドイン」ではなく、「クリエイティド・イン関西」といったことになろうか。文明論の大きな枠組みで、お話をいただいた。

#### (佐藤友美子 氏)



生活文化という視点から述べたいと思う。私は20年ほど生活文化の研究をしていて、サントリー不易流行研究所に長く携わっていた。そこでは、生活の

楽しみをテーマにしていた。集いや社交など、人と人がどう関わり合うのかということが非常に大きなテーマだったので、その中でお茶会やホームパーティーなどを様々な体験した。

どちらからといえば、お酒の会社の研究所なので、本来お酒が様々な人たちのコミュニケーションの媒介になるという話であるが、お茶も深い話があると感じた。

先ほどの谷先生のお話にもあったが、生活文化の全てが含まれている。お茶は様々な生活文化を感じるものがあるが、では具体的に今の社会の中でどのように展開できるのか。先生方がいわれた、「ほんまもん」であることは確かであると思うが、今の生活者にとってどのような意味があるのか。もしかすれば、「ほんまもん」は博物館に入って、生活と遠いものになっていないだろうかというのが私のお茶に対する問題意識である。

昔はお茶の時間というものがあったが、今、企業などにそのような時間はない。お茶を淹れる場合も、勝手に飲むという文化である。

先日、スウェーデンに行った際、今でも10時と15時に皆さんお茶をするというのでむしろ驚いた。自分の机から集まって来て、それはコーヒーかもしれないが、クッキーがあり、そこで皆で10分や15分ぐらい話をするという。どうも日本人はお茶をたくさん飲むわけだが、モノとして飲んでいるにすぎないのではないかということを感じた。その点を考えないと、「ほんまもん」であって欲しいが、私たちにとってすら日常的なものではないわけなので、海外の人たちにそれほど受け入れられる以前の問題がまずあると思う。

日本の魅力について関経連の「関西ブランド力向上研究会」において、私は副委員長を務めたが、海外の方へアンケートを取ったが、日本は歴史文化を持っているらしいが、あまりよくわからないと。一方



で、どのような暮らしをしているか興味があるということであった。歴史文化なしでは海外の方は興味を持たないかもしれないが、関西を訪れてみれば人間的な触れ合いがわかるかもしれないが、その前段階で止まっている。私たちが持つ、「ほんまもん」に対する意識はそれに近いものがあるのではないかと。

せっかくこのようなお茶の催しをされる際に、そのあたりをどう考えるかという点も一つ検討する必要がある。「ほんまもん」を生かしていく共通の知識や知恵みたいな部分がまだ皆の中にはないのではないかと、という心配になる。

サントリーの事例でいえば、サントリーはウイスキーをつくってきたが、どんどん品質の高いものを製造し、高級なものを売り出し、皆がウンチクを語るようになった。一方で特に若者から距離が徐々に離れていった。それが、この数年、ハイボールということでヒットした。距離を近づけたわけだが、このキーポイントは安くても結構美味しく飲めるということと、ウンチクが要らない、集まって皆で楽しくできるということである。このように、若者に近づける模索がサントリーにあった。ウイスキーが売れなくなりどうしようかというなかで、皆が求めているものがあるのではないだろうか。現在は、若い女性たちが浴衣をみんな着ようになった。浴衣を1枚しか持っていない方はいない。何枚も持っている。また、お茶をやってみたいという女性はかなり多く、現在、お茶をやっていない方でも着物を持っている。昔のような振り袖ではなく、もっと日常的に自分の暮らしが豊かになる、というものである。ハレの日ではないところで、楽しみたいという欲求は多くの人が持っている。身近なところから入り、徐々に自分のものにしていくプロセスがあり、それがコミュニケーションであったり、楽しみになったりする。その過程を作ることが大事だと思っている。

今回お茶ということで文化首都に流れるわけであるが、日本にあるのはそこに住んでいる人たちが十分楽しんで誇りに思っているかどうかである。それは、明日、明後日のお茶会で繰り広げられるのではないかと思うが、その点でどのようなことが可能なのか。関西が「本物」の力を持っているのかどうか、というところではないかと思っている。

## (寺本益英 氏)



大学の専攻は日本経済史で、最近10年くらいは特に京都のお茶業界の方と協力して、宇治茶の振興について研究している。「はなやか関西～

文化首都年～」プロジェクトではアドバイザーを務め、また現在は、宇治茶の世界遺産登録を目指す取組にも携わっている。今日はそうした経験に基づいてお話しさせていただきたいと思う。

本年の「はなやか関西～文化首都年～」はお茶がテーマとなっている。その場合、やはり中心になるのは宇治茶である。ここで宇治茶のブランド力がどのように形成されてきたのか、みていきたいと思う。

まずお茶は飲料なので、大事なのは本質的価値、すなわち美味しさである。しかしそれだけではなく、お茶に対して良い印象を消費者に持ってもらう必要があることも考えると、歴史的なストーリー性が重要になってくる。美味しさと歴史的ストーリー性の2点において、宇治には優位性があった。

美味しさと関連で述べると、技術の先進地であり、非常に高品質のお茶の生産が可能であった。端的にいうと、茶栽培に適した自然条件であり、丁寧な茶園管理が行われていた。特に重視したのは、覆下栽培を行っていたということ。皆さんも、黒いシートで覆われた茶園をご覧になったことがあると思う。このような栽培方法を初めて開発したのが、京都の宇治地域だった。覆下栽培方式をとることにより、旨みが多く、渋みの少ないお茶を生産することができた。古い史料によると、16世紀後半ごろから、この覆下栽培が始まっている。

現在、我々は急須にお茶の葉を入れ、お湯を注ぎ、きれいな黄緑色のお茶を飲むことができる。これが煎茶で、1738年永谷宗円という人が開発した宇治製法のおかげである。これはお茶の技術面では、画期的なイノベーションになったと思う。

さらにほぼ100年後に高級茶の代名詞である玉露も宇治で誕生した。こうした歴史からもわかる



ように技術の先進地であり、今はやりの言葉でいえば、宇治地域にはお茶のクラスターが形成されていた。そしてクラスター内部に、技術や市場に関する様々な情報が蓄積されていた。クラスターの密度が、他の産地とは比較にならないほど濃密であったことが、栽培・製茶技術を高め、美味しさの源泉になったといえる。

もう一つ重要な点は、権力者の保護を受けながら発展してきたことである。宇治茶の発展は3つの段階に分けることができる。

まず室町時代、3代将軍足利義満は宇治川畔に七園を開かせた。そして濫造を防ぐため、茶師たちに種々の特権を与え保護する代わりに外部への販売を禁じた。さらに8代将軍義政の時代に、そのブランド力が一層高まることになる。義政の時代には専門の茶師が登場するが、この茶師たちが現在世界遺産に選定されている宇治上神社、平等院などのような有力寺院の関係者であったことも、ブランド力を高める大きな源泉になったといえる。

そして義政の時代の東山文化の中で、村田珠光によって侘び茶が創出され、安土・桃山時代に至ると千利休が出て茶道が完成した。当時の最高権力者であった織田信長や豊臣秀吉がとてもお茶を愛好し、アドバイザーの役割を果たしたのが、利休である。権力者やそのアドバイザーのお茶を支えたのが、宇治の茶師たちであったという構造になっている。

このようにして高められてきた宇治茶のブランドは、江戸時代に入り、3代将軍徳川家光の時期に御茶壺道中が制度化され、確固たるものになったといえる。

話は変わるが、先ほど永谷宗円が宇治製法を開発したと話したが、その後煎茶道の文化が上田秋成、田能村竹田、頼山陽ら文人たちを担い手として、京都や大坂を中心とした関西を中心に展開していく。中国の明・清の時代の道具に囲まれ、上質の茶を賞味しながら、詩文・書画を鑑賞し、学問・芸術について語り合うサロンが彼らの間に広がっていったのである。

日本を代表する文化である茶道や煎茶道の文化が関西で育まれたことの周知が不十分とすれば、この点をもっと強調していく必要があると思う。

#### (橋爪紳也 氏)



文明論・文化論から、宇治茶のブランド形成という話に戻って来た。お茶というものは楽しみ方も多様で、様々な文化・文明を生み出したことがよく分かる。

では、二巡り目に入る。関西、日本に引きつけていただきながら、今後、文化首都圏としてブランドをどうすればよいかという部分も含めてお話をお願いします。まずは角山先生から、先ほどはイギリスのお話で終わってしまったので、堺の話をお願いします。

#### (角山榮 氏)

先ほどお話したなかで関西は出てこなかった。イギリスが関西のどことどうつながっていたのか、それをまず申し上げたい。

イギリスやヨーロッパ人が、いつどこでお茶を知ったのか。まず、中国のお茶、もう一つは中国産の絹が紀元前からシルクロードを通して、ヨーロッパへ渡った。ところが、これほど古い中国文化のお茶が、古代はもちろん中世でも知られなかった。16世紀といっても、エリザベス1世、シェイクスピアもお茶を知らなかった。ところが、ヨーロッパ人は16世紀中頃に日本を訪れ、そこで初めてお茶と遭遇し、日本の文化として感動を受ける。ヨーロッパ人が来日した堺において初めて茶会と出会う。彼らにとって、初めはつまらぬ遊びをやっているという理解であったが、やがて、お茶が素晴らしい文化であることを認識する。その理由は何にか。通訳として来日したジョアン・ロドリゲスに『日本教会史』という本がある。ポルトガル語で書かれているが、1634年ぐらいだと思うが、ちょうどイギリス王室にお嫁に来たキャサリンも知っているはずだ。何がすごいのかといえば、人と人の人間関係を大切にすることもなし、そうした触れあひもてなしはヨーロッパには今までなかった。もっとはっきりいうと、個人主義のヨーロッパでは、困った時にはまずオール

マイティーのイエス・キリストがいる教会を訪れ、司祭を介して、対話して最後には愛をもらって解決していた。

日本にはオールマイティーな神がない。その代わりに何があるかを発見したのが『日本教会史』に書かれていることだ。一言でいうと、オールマイティーな神がない日本では、この茶の湯文化を通じて形成される人間関係を大切にする。つまり、大切な絆を切るなということがその裏にはある。

茶の湯文化は儒教の「五常」(仁、義、礼、智、信)という倫理を哲学としている。カントの哲学がいうように論理と倫理と美学が、茶の湯文化の哲学の中に全ておさまっている。「一期一会」、「和敬清寂」という哲学と礼儀正しい倫理によって互いに信頼関係をつくらなければならない。このような歴史は中国にはない。日本の茶の湯がつくった。したがって、「一期一会」、あるいは「和敬清寂」という言葉は中国語ではなく日本語である。

このような茶の文化が、なぜヨーロッパ人に認識されなかったのか。それは日本の歴史家が説明してこなかったからである。茶の湯の研究は国内ばかり向いていた。ところが、オランダ・アムステルダムでは1701年に「ティーにいかれたご婦人たち」という劇が上演され、その中に茶の湯の真似をして、ご婦人たちがお茶を淹れて大きな音を立ててすすりながら一緒に飲むという場面がある。日本文化に憧れを持っていた人がいたことがわかる。茶の文化はオランダからイギリスに入ってくるが、その発信地は堺である。しかも世界に発信している。なぜ経済学を専門としている私がお茶の文化を研究しているのかとよく聞かれるが、それは、堺から茶の文化が世界に広がったことを理解していただくためである。

また、もう一つには、こちらに本を用意しているが、新しい文化として「CHAの文化」を堺市から発信している。Cはコミュニケーション、ふれあい、Hはホスピタリティー、もてなし、そしてAはアソシエーション、人間関係の形成のCHAの哲学、文化を中心に、堺なんや衆という市民団体が10年間にわたり活動を行っている。

### (橋爪紳也 氏)

角山先生からご紹介の本は、受付に何冊か置いてあるので、後からご覧いただきたいと思う。

### (千田稔 氏)



今、思いつくことがあるが、先ほどの話の延長線上にのせたいと思うが、日本人が自ら生み出したものよりも、日本人は海の彼方のものは非常に好きであり、

憧れる。その点は日本人の一つの特性だと思う。

例えば喫茶店が昔からあるが、それがヨーロッパ文化から日本の中に現れたときに、コーヒーと紅茶というヨーロッパ、アメリカ的な飲料を飲むところであって、まず緑茶というメニューは全く出てこなかった。そこから日本のいうなればお茶の文化の外来性というものがどんどん濃密になってくる。つまり、緑茶は喫茶店に出てこない。もちろん、今は和風の喫茶店があるが、それは、今は問題にしない。

ということは緑茶の文化は家庭内の生活の中にある。外に出るコーヒーや紅茶を飲むという一つの文化を持ってきた。ところが、外での喫茶店で飲むコーヒーや紅茶は非常にヨーロッパ的、アメリカ的であって、日本人にとっては憧れの飲み物になっている。

それが今度は家庭の中に入って来て、コーヒー、紅茶の方がよく飲まれるようになり、どちらかというと緑茶の方がその存在感を少なくしているという、それが日本人のお茶の文化に対する現状みたいなものである。ところが、お茶は先ほど角山先生が話されたように、例えばお茶のみ友達やお茶を飲みながら話すことや、お茶というのは人と人の関係を強める働きをしている。人と人との関係を強めていた。家にお客様がこられるとコーヒー、紅茶を出す方が多いのではないか。それがヨーロッパの飲料、コーヒー、紅茶に追われてしまった。

そうすれば、逆に大阪にもあると思うが、和風喫茶が出てくる。和風喫茶は現代の特に若い人たちからみると、緑茶を出してくれる喫茶店というものは、何か異国の文化のようになってしまっていて、むしろ自分の国の文化がコーヒーや紅茶になってきているという

文化の逆転現象が起こってきている。これは喜んでよいのか、悲しんでよいのかといえば、やはり悲しむべき現象である。

そのようなことでヨーロッパ的なものに憧れてきた日本人というものがもう一度「ほんまもん」の緑茶の文化に戻ることによって関西文化の一つであるお茶を見直すことができる。そういうことになってくる。

茶粥は奈良で発達しており、一般的には貧しい農家の食べ物として茶粥が食べられることになる。そのような時代があったわけだが、いまや茶粥懐石は高級化しているなか、先ほどの和風喫茶同様あるいは茶粥懐石が高級志向になってきている。これは、おそらく「ほんまもん」から離れて宙に舞っている姿ではないか。これをもう一度、ひっぱり下げて、ようやく関西の土着の文化として見直す必要が出てきているので、この催しは非常に意味があるような気がする。

#### (佐藤友美子 氏)



美味しいお茶はなかなか飲むことができない。美味しい日本茶を淹れるのは結構難しいし、相手のことを考えたり、タイミングを考えたり色々なことを考えな

ければならないので、思っているよりずっと難しい。よそに行って、美味しいお茶が出てくると、この人は気のつく、よく出来る人だ、と感じるようなものである。

今回のこのような催しは良いきっかけになると思う。先ほど橋爪先生もいわれたように、これはきっかけにすぎなくて、この文化首都の問題点は、テーマが変わる際に今年度、来年度と各1回限りになると、決して「本物」は根付かないと思う。今回の場がきっかけとなり、どうつなげていくのが問題だと思う。

今回は、茶の生産に関しても考えられたということだが、それはすごく大事で、文化としてだけで高尚なものとして捉えていると限界がある。経済循環の中に入っていくと、どんな文化も決して成り立たない。

企業もメセナのように、お金を出せといわれて、弊社も随分お金を出していたわけだが、それで本業が

まわっていかないと社員も株主も納得しないわけである。文化は祭り上げるものではなく、循環の中に組み入れてこそ意味がある。そのことは市民も考えなければならぬ。企業や行政がやればよいのではないかという感覚でやっていると、文化が大事だといながらも、音楽会もあまり行かないし、関西はそういうところが結構ある。実際に関西で音楽会を開催しても人が集まらない。市民が本当にやる気だったら一つや二つを応援することが大事になる。お茶もその一つだと思うが、お茶の文化を次に何らかのかたちで自分のものにしなければ意味がない。今日は抹茶や美味しいお茶を買って帰ろう、という市民レベルでできることはたくさんあると思う。私は、それをやることで結局経済の循環の中にきちんと文化を入れていくことで、参加できる一つのやり方だと思う。

今回のイベントでは、学生さんが参加されている。普通に考えると茶道部だが、全く違う方たちが参加している。すごく新鮮である。逆にいえば、ずっとやっている方たちが従来のパターンから抜け出すのが難しい傾向にあるように思う。そういう意味で今回は期待が出来、面白いことが起こるのではないかと期待している。

その意味では、「本物」があるけれど、「本物」を体感するために何が必要か、自覚し、皆で実際に何ができるのかを考え、実行することが大事である。

奈良といえば大仏と修学旅行で集客がうまうましていたが、宿泊者数は日本で最下位である。旅行客に素通りされているのでお金が落ちない。それではどうしようかと考えて、燈花会を生み出した。奈良の良さを活かすというよりは、奈良のマイナスだと思ったものをプラスにして、燈花会のようなかたちになっている。ろうそくの灯はあるが、結構暗いなかで歩くわけである。そのような発想の転換をして、市民に本当に近づくために必要なもの、その中でも若い学生のアイデアは非常に役に立つのではないかと考えている。もしかすれば、おばちゃんパワーも役に立つかもしれないが、従来の枠組みでないものを、この機会に是非提案し、実行して欲しいと思う。

そして、今回のこのきっかけをどう次につなげていくのか。主催者がせっかくできた関係や、コミュニケーションの場を次に生かすことができるかという点にかかってくると思う。これまでの行政は1回まででは



きる。しかし、2 回はない。しかし、多くの人が参加したのは大きな財産。市民としてできることも、「茶の文化」ではたくさんあるように思えるので、すごく良い参加ができたのではないかと思う。

#### (橋爪紳也 氏)

今のお話のなかにあった「大仏商法」はご存じだろうか。奈良ではよく言われている話で、大仏様からのご利益を求めて、一生に一度だけ奈良を必ず訪れる。したがって、きちんともてなす必要はないという考え方があった。最近では脱大仏商法で反省しているようである。強力な目玉、シンボリックなものに頼り、大事なことを忘れていないか、というお話であった。

#### (寺本益英 氏)



この4月からスタッフのみなさんと相談しながら、「はなやか関西～文化首都年～」のプロジェクトを進めさせていただき、成果も出てきているところ

ろだと思う。この成果を長期間にわたり持続させることが非常に重要である。その際の目標は、お茶を構成する様々な要素のアピールである。メインは、茶道や煎茶道の文化とそれにまつわる精神性である。そして、茶室、寺院、庭園、茶道具、絵画のような文化財も看過できない。技術面では、茶園管理や製茶技術、そして茶園の景観も含めべきだろう。ユネスコの記憶遺産の発想で考えてみると、茶書や古文書もある。とにかくお茶にまつわる様々な文化遺産や記録史料をしっかりと守りつつ、将来に伝えていかなければならないというのがこのプロジェクトの今後のテーマになると考えている。

また別の角度からこのプロジェクトの成果を述べたい。わかりやすいたとえを出すと、現在経済状況が悪く、失業や倒産が相次いでいる。しかし失業や倒産は、いくら個人や企業ががんばってもどうにもならない側面がある。なぜならマクロ経済という土台が不安定な中で、個人や企業の努力

には限界があるためだ。同じことが茶業界にもいえる。個別のお茶屋や組合は一生懸命に喫茶文化の振興を目指し、これまでも工夫をされてきたと思うが、それをしっかりと支えるベースが十分整備されていなかった。基盤整備を急がなければと前々から思っていたが、このプロジェクトを通じてはじめて基盤をつくっていただいたのはよかったと思う。この基礎をこれからしっかりと受け継いでいくことが大事な目標になると思う。

次にこのプロジェクトがさらに一層の広がりを持つためにはどうすればよいのか提案を試みたい。

お茶を考える場合、二つの視点がある。まず、産業としてのお茶、これがしっかりとしていないと文化としてのお茶、喫茶文化が発展をしない。現在、リーフ緑茶離れが急速に進んでいる。『家計調査』で計算してみたが、2010年のデータによると、飲料費に占めるリーフ緑茶への支出額は、戦後はじめて10%を下回った。若者の緑茶離れは特に顕著で、一番若い20代ぐらいの世帯主と70歳以上の世帯主の消費量の差をみると、6～7倍ぐらいの開きがある。お茶はそれほど年齢階層による消費の違いの大きな飲料だといえる。

そして近畿は茶の生産地であるが実は消費地とはいえない。県庁所在地と政令指定都市51の都市を順番に並べた場合、金額ベースでみると、京都市や堺市のようにお茶にゆかりの深いような市でさえ、真ん中より下の順位である。むしろ、コーヒーやジュースの文化の方が根付いているのが実態である。

さらに生産面では、お茶の価格が継続的に低落しているし、担い手の高齢化、後継者不足など、課題山積である。

なぜこのような問題が起こっているかという、生産者を出発して消費者に届くまでのお茶のフードシステムにおいて、心理的距離が長くなり、ブラックボックス化しているためである。生産者は、自分が作ったお茶をどのような消費者がどのような生活シーンで飲用しているか、把握しているだろうか。逆に消費者のこんなお茶を飲みたいというニーズが、フードシステムを遡って生産者まで伝わっているだろうか。どちらもそうではないと思う。この距離を縮めるということが重要だと思う。

例えば、安土・桃山時代や江戸時代の状況を見ると、茶人たちの要求が手紙などで茶師にスムーズに伝わり、茶師はそれに応じて常に改良を加えていた。フードシステムの距離が短く、「顔の見える関係」であった。フードシステムの川上から川下へ、川下から川上への情報伝達がスムーズに行われるようにすることが大切である。

繰り返しになるが、「はなやか関西～文化首都年～」における取組を途切れさせず、さらに促進していくことの重要性を強調したい。それから、現在 TPP との関連で日本の農業をどのように強く立て直してゆくかが大きな問題になっているが、これからの一つのキーワードは6次産業化である。1次産業、2次産業、3次産業が一体となり新しい付加価値をつくるという方向性が大事になってくると思う。近畿地方整備局には、事業者が様々な事業に参加しやすいよう、今回のようなプロジェクトを立ち上げてバックアップしていただきたいと思うし、ホームページなどを通じた PR の支援にも期待したい。

一方文化の方は、美術館に関しては谷先生の監修で、「関西はなやか美術館－関西で「本物」の茶道具を所蔵する美術館－」のガイドブックが作成されている。これは大変わかりやすく、立派である。今度はそれに相当するような、お茶にゆかりの深いスポットのアピールが要請されている。例えば、茶室や庭園を紹介するガイドブックの作成が考えられる。講演会やシンポジウム開催も大切だと思う。出版物、あるいは WEB の案内を通じてお茶の素晴らしさをもっとたくさんの人たちに知っていただく。そしてお茶の文化は決して特殊なものではなく、高等学校で学ぶ日本史の中の文化史の知識があれば十分その内容がわかるということをもっと伝えていく必要があると思う。

#### （橋爪紳也 氏）

若い人たちがお茶を飲まなくなった。茶の文化の意義を再度、つくり直すということはどういうことなのか考えられていない。今回は、近畿地方整備局のプロジェクトの枠内だが、近畿経済産業局にも考えていただかなければならない問題だと思う。

ここから少し時間を取り、質問を受け付けたい。まず先ほど角山先生から堺は世界の中の宝だという強力なメッセージをいただいたので、関係者の方が一言あればもう一度、堺をアピールしていただければと思う。願います。

#### （堺なんや衆）

私たちは角山先生がいわれている「コミュニケーション」、「アソシエーション」という精神に基づいて茶会や勉強会を行っている。お茶的でありながらも、紅茶や中国茶、他にはアルゼンチンのお茶でマテ茶を出すなど、どの方向性から入ってきてもお茶というものに最終的には向かうような取組を行っている。

私たちの活動を通して、お茶に興味を持たれる方たちの裾野が少しでも広がればよいという思いを持って活動を進めている。



#### （橋爪紳也 氏）

ありがとうございました。この「はなやか関西～文化首都年～」では、堺に限らず、各地でがんばっておられる方々、地域に根差した活動をされている方々を応援し、他の地域とつながっていくことが大事なことだと思っている。

もし、他に質問があれば、簡単に自己紹介していただき、どの先生に何を聞くのかを仰っていただければと思う。

#### （会場）

寺本先生に2点質問をしたい。1つめは、日本の茶の文化が外国から入ったコーヒーや紅茶などに押されて消費量が減っているとのことだが、若い人のお茶離れをどのように阻止するか。これはお茶だけではなく日本の伝統文化を、佐藤先生のお話にもあ



ったように、どのようにして若い人に引き継ぐことができるのかという課題である。2つ目は、先ほども出た TPP 問題で農業と伝統文化と介護・医療の3つの問題があるが、この中で伝統文化を、TPP 問題としてどのように解決すればよいか教えていただきたいと思う。

#### (寺本益英 氏)

まず、若者の緑茶離れをどのように阻止するかという点について、年齢が上がれば飲料の嗜好が変わり、緑茶をよく飲むようになるかという、それは言えない。

例えば、現在 30 歳の方は 10 年経てば 40 歳になり、さらに 10 年経てば 50 歳になる。現在 30 歳の方が 50 歳になれば、ジュースやコーヒーを飲むのをやめて緑茶にシフトするわけではなく、若い時に形成された嗜好のパターンは年を重ねても平行移動して変わらないという傾向を以前私は確認した。したがって、お茶の魅力を食育の中に組み込んで、小さいうちから親しんでもらうことが大切だと思う。

ここでひとつ提案がある。日本にお茶が本格的に普及するのは栄西の時代であるが、栄西の茶の飲用目的は、修行時に襲ってくる睡魔を取り除くことであった。いつも業界の方々に申し上げているが、受験勉強をしている学生さんたちに、高級なお茶を飲んで眠気を覚まし、入試を乗り切ってほしいとアピールするのは、若者のリーフ緑茶離れに対する有効な対策ではないか。

次に TPP 問題であるが、貿易の自由化がなされても、日本茶が海外のお茶に置き換えられることはまずないと思う。今でも品質的には圧倒的に日本のお茶が勝っていると思う。

よく言われているスターバックスのようなチェーン展開は、コーヒーでこそ若者に受け入れられているが、マニュアル化して機械的に淹れにくいお茶には馴染まない面がある。個人的には、それとは違った方向で、いざがんばらなければというような特別なシーンにおける飲料として PR していく方がよいと思う。

#### (橋爪紳也 氏)

私は子どもの時に、コーヒーは大人の飲み物だから飲んでダメだといわれ、大人になってから欠かせなくなった。お茶の「食育」は大事だと思う。ただ、どのようなお茶の教育をするかを考えるとなかなか難しい。他にもう一人だけ質問があればお願いする。



#### (会場)

佐藤先生に一つ質問をしたい。「茶の文化」というのを佐藤先生は今後根付かせていくためには、今年度限りではなくずっと続けていかなければならないといわれていたが、今回の茶の文化を世界、日本に根付かせるために具体的に来年からどのようにしていけばよいのか、お聞きしたいと思う。

#### (佐藤友美子 氏)

例えば大阪歴史博物館でお茶を飲むことができる場所があればよいが、その場所もない。街に出ても喫茶店では抹茶を扱っていない。日常的にいつでもトライできる環境があればよい。

私は京都のお寺巡りをする際、必ず抹茶を飲みたくなる。ホテルのロビー喫茶などでは抹茶を飲めるところもあるが、そういうところしかない。もっと身近なところで抹茶を置いてもらうとか、日本の美味しいお茶を淹れてもらうとか、そういうことがあれば、海外の人たちもどこへ行っても抹茶を飲む経験ができる。そのホスピタリティーに加えて冊子のようなものが付いていると、抹茶が日本の文化としてこのように根付いてきて、このように広がっていつか今があるということが理解できると思う。その意味では、宣伝するというより前に、まず、アクセスできるような状況になっていないのではないかと思う。抹茶を飲むことができるカフェをたくさん増やすということもできるし、若い人ならではの機動力で、最近ではスターバックスでもお茶を

使ったメニューが出てきて、抹茶関係の飲料を選ぶことができる。かえって、そのようなところの方が商業化して早くどんどん取り入れている。

日常生活でお茶に馴染むことができる状況をつくることは、市民に出来ることだと思うので、是非お店や文化施設などでは是非やっていただきたいと思う。

#### （橋爪紳也 氏）

ありがとうございました。フリーディスカッションを進めてきたが、終了の時間を迎えようとしている。最後に先生方には一言ずつ今日の感想などメッセージをお願いします。

#### （角山榮 氏）



お茶の問題は日本だけの問題ではない。先ほどからイギリスの例をずっと申し上げたが、ビクトリア時代に「家庭の和」、「家庭の中に幸福の青い鳥がいる」とい

われていたが、現在は、その家庭が断絶、あるいは絆が崩壊している。そして、若い人たちが7回も食事するという記録があるように、家で食事をせずに出食するという状況に変わってきている。日本は、お茶を文化として扱ってきたが、これからは商品としても扱うことも考えるべきではないか。今後、新しいものが出るとすれば、これをどのように商品化するのか。日本ではお茶をペットボトルにした。これは普通のお茶を乗り越えたといえる。そのような意味でも、経済が絡み、世の中の動きとともにお茶の有り様も動いていく。そして、ライフスタイルも変わっていく。これは、私が一番心配していることである。

しかし経済の方では、現在、お茶はペットボトルにすることで企業が成り立っているところがあるわけである。経済の中の問題になるが、このような現実を認識した上で、問題を取りあげた方がよいと思う。

#### （橋爪紳也 氏）

ありがとうございました。現在は、ペットボトルに入ったお茶が日本文化を背負って、東南アジアや中国、世界に展開しているといえる。

#### （千田稔 氏）

難しい問題だが、結局飲料水が自動販売機にも溢れているわけである。その中で緑茶や日本茶が生き残ることができるかということは、かなり過当競争のなかで揉まれているのが現状だと思う。

つまり、既に飲料水のグローバル化がどっと来ているわけである。そこでいわゆる日本茶が断トツで1位になることは難しいのではないかと思う。しかし、それでもなお日本茶の文化を残そうとしたときに、その残すことができる場所というのが、かなり限定されてくるのかもしれない。家庭の中かもしれないが、やはり街中では2番目のお茶は流通されなくなるかもしれない。

つまり、グローバル化の中でどれだけ存在させることができるのか。はっきりいって日本は明治維新からグローバル化をどんどん進めてきた結果、街の風景もヨーロッパ風になってきている。あるいは食べ物の嗜好もヨーロッパ風になってきている。

ヨーロッパ化、あるいは無国籍化になってきている。その中で日本茶がどれだけ日本という国籍を保つことができるのかというと、むしろ不安材料の方が多いのではないかと思う。

#### （佐藤友美子 氏）

弊社はお茶をペットボトルに入れたくさん売っているし、水も売っている。産業としては、逆にいえばニーズがあるからこそやっていると思うが、生産やニーズという観点だけではなく、もっと発掘する部分があると思う。家族で夜の時間に集まってお茶をしようかということ、集まるということをもう一度考えてみるべきである。

お茶が先か、集まるのが先なのかかわからない。先ほど堺なんや衆の方もお茶は日本茶に限ったわけではなく、和風に限ったわけではないといわれたように、たまたま日本茶が出るかもしれない、その程度でよいと思う。

日本の文化や家族に思いを馳せてみて誇りを取り戻すということが恐らく文化首都の究極のテーマだと思う。その点をもう一度考え直すきっかけを今日も貰ったし、これからはしばらく考え続けていくことになる。どのようにやっていけばよいのか、結構これから厳しい状況が続くので、そのなかでどうやって自分たちのアイデンティティをつくっていくのかということを考える一つのきっかけとしてお茶もある。

美味しいお茶を淹れることが本当になかなかできない。自分の子どもになかなか教えることができない。にもかかわらずきちんと教えていくということが、もしかすれば教育の現場でもあってもよいかもれない。また、抹茶は歳をとってから飲むもの。若い時から飲むではいけないという感じがある。普通に飲むお茶をどうやって美味しく飲むのかということは是非伝えていきたい。

#### （寺本益英 氏）

栄西の『喫茶養生記』は、「茶は養生の仙薬なり、延齡の妙術なり」という書きだしで始まっているが、お茶には様々な保健効果があり、それは直感的には 800 年ほど前から明らかになっていた。薬学や医学の発展により、科学的に証明されているわけである。

お茶の魅力として、何よりも保健効果を一層強調していく必要がある。それと同時に、歴史性、文化性、精神性に留意しながら喫茶史をたどると、日本文化史のメインの流れが浮かび上がってくる点も見逃せない

経済効率第一主義で心にゆとりを持つことができなくなっていることを改善するためにも、もっとお茶を中心として文化に親しんでほしいと思う。博物館や美術館で優れた展示物を見る、あるいは非日常体験でよいので、茶道や煎茶道の世界を少し体験してみると、ずいぶん心が豊かになる。国民の心が豊かになれば、経済にも活力が生まれるに違いない。そのような手がかりをこの「はなやか関西～文化首都年～」でつくっていくことができればと願っている。引き続き是非皆さま方のご協力をいただきたいと思う。

#### （橋爪紳也 氏）

本日のパネルディスカッションでは時間を超過してしまった。文化論、文明論、女性論、産業論など多岐にわたり、かつ様々なキーワードがでてきたと思う。

「ほんまもん」というのが関西文化首都のキーワードになる。千田先生がいわれたように宙に舞ってしまい、どこにいくのかわからないようになった「ほんまもん」の文化をもう一度我々の土地に根付かせて「ほんまもん」をつくるのが、次の世代への我々が取るべき姿勢ではないかと思っている。

従来の「ほんまもん」を大事にし、まちづくり、ものづくり、ひとづくりに活かす。加えて新たな「ほんまもん」をもう一度作り出す動きを産み出さなければならぬ。そのためにも、関西の各地でお茶に関する文化的な取組がますます盛んになることを願う。特に冒頭でも申し上げたが、産地と消費地をうまくつなぐ試みが重要だと考える。

関西全体で連携して、強く「ほんまもん」の文化を打ち出していくという皆さんの思いをこの場で一つにできたと思う。それを持ってこのパネルディスカッションのとりまとめとさせていただきますと思う。最後までありがとうございました。

#### 4. 閉会挨拶

##### (京都嵯峨芸術大学観光デザイン学科)



皆さんこんにちは。いよいよ明日から「はなやか関西茶会記」が始まります。私たちも「関西カル茶

ー」というブースで参加しています。今回の企画でお茶の歴史を調べているうちに、もっともっとお茶というものを身近に感じるようになりました。

明日からのイベントでは、たくさんのお茶にまつわるブースや企画があります。そこで新しいお茶の魅力を発見してください。そして、皆さんにもさらにお茶を身近に感じていただきたいと思います。

ご来場をお待ちしています。



以上